ヨーロッパにおける〝遊び〟の概念と、医史学への影響

"Der Mensch ist nur da ganz Mensch, wo er spielt"

グレゴル・パウル

「人は、遊びの中においてのみ真に人となる。」フリードリヒ・シラーのこの言葉は、今日までドイツの哲学者、社会科学者、精神分析家の心をとらえてきたヴィジョンを、おそらくもっとも適確に表現している。遊びと遊び行動の中でこそ、人は、義理と人情（Pflicht und Neigung）をうまく統合し、いわば責任を自覚した、自由で幸せな生活を送ることが可能になる。同時にこれによって人間性のすべてが、本来の権利にめざめるのだという。

ヨーロッパにおける哲学的、社会科学的、心理学的、医学的な考えは、ギリシアの古代から、人間学的二元論というものに規定されてきた。人は《精神的—感官的》（geistig-sinnlich）存在であったし、いまもそうだという。この規定に従って（暗に認めて）論じられる問題、すなわちしばしば精神病の発端となる「身心葛藤」「義理人情の葛藤」「個人的欲求と社会的規範の間の葛藤」の問題もこれと同じくらい古い。「心身症」という医学専門用語にも、その体系的起源が読みとられる。

ヨーロッパ史の中に示された葛藤の解決法は多くの場合一面的である。それは人間の心か体のどちらかに重きをおく。

プラトン主義やカトリック教義は、体を心に従属させるように説く。この点は今日のカトリック教義でも同じである。フロイトの「現実原則」の概念も同じ方針をとる。実際的―政治的超現実主義は、相反する解釈の代表的な例である。これらの解決法はすべてそれぞれ、数多くの具体的な心身葛藤にさまざまな形で根ざしており、いまもなおそうである。

人の体も心も自律に委ねるという考え方は、カントの美学を範として提起された。カント美学の人間像は二元的ではない。精神と感官のほかに人は第三の能力をもつ。すなわち「快・不快の能力」である。人は精神的、感官的関心をうまく調和させることができる。カントにならって、シラーは、形成本能（Formtrieb）、物質本能（Stofftrieb）、遊びの本能（Spieltrieb）を区別した。遊びの本能は美の原点である。人はこの本能と結びついた心構えが第二の天性となるまで、その本能を涵養すべきである。そうすれば個人的政治的に自由な生き方が実現できるという。フロイトの「快楽原則」と「現実原則」の考え方に対する批判の際には、ライヒ（Reich）とマルクーゼ（Markuse）は、カントとシラーを引合いに出している。

シラー、ライヒ、マルクーゼの考え方を主として略述したあと、それが思弁上の構成や幻想以上のものであることを論証しようと思う。とくに、医学の日常問題の解決、すなわち「治療構想」について、哲学的省察という形で寄与しうるかどうかを説く。さらに、「遊び」がこの場合、日常用語と、いったい、あるいはどの程度まで一致するかについて述べることになろう。

（カルルスルーエ大学・大阪市立大学）

グレゴル・パウル博士は、一九四七年、現在東独のマグデブルグ生まれ。チュービンゲン、ハイデルベルク、マンハイム各大学で哲学、独文学、数学を専攻。七六年カントの美学とシュルレアリズム絵画の研究で文学博士、八三年、美学理論の研究で教授資格授与。科学論、美学論、日本中国の古典哲学、宗教論文多数。カルルスルーエ大学、昆明大学で教え、現在大阪市立大学で独文学の講義担当。